

# 学業半ば 同期は特攻に

**■ 学徒出陣** 太平洋戦争の戦局悪化に伴い、1943年10月、理科系などを除く20歳以上の学生・生徒も徴兵の対象になった。動員された総数は不明だが、約10万人との指摘もある。一部は特攻隊員として出撃を余儀なくされた。



学徒出陣の壮行会の様子を伝える読売報知夕刊の紙面

## 学徒出陣80年

太平洋戦争中の1943年10月、明治神宮外苑競技場(東京)で学徒出陣の壮行会が開かれて21日で80年となる。今年10歳を迎えた元学生は「学業の志半ばで多くの同期生が犠牲になったことを伝えていかねば」と語る。  
(川畑仁志、押田健太)

### 「平和の幸せかみしめて」



「もう1か月戦争が延びていたら、特攻隊員として出撃していたかもしれない」と語る阿山剛男さん。(11日、横浜市で)

「あの日は雨が降っていた、とにかく寒かった。土砂降りではなく、行進で歩踏み出すたびにビシヤ、ビシヤという音がした。早稲田大商学部2年生だった横浜市の阿山剛男さん(100)はそう振り返る。

式には首都圏の大学や専門学校など77校の男子学生約2万5000人が参加したとされる。観客席には、その姿を見送る女子学生ら約7万人が詰めかけた。阿山さんは早大で徴兵猶予が停止された約4500

人のうちの1人だった。詰め場のトラックを行進し、グラウンドに整列した。列の後方にいたため、壇上で訓示する東条英機首相の声は聞き取れなかった。

### 元女子学生「洗脳されていた」

#### 雨のスタンド 壮行会で声援



壮行会でかみ上げた角巻を手に、当時を振り返る土屋静子さん

当時18歳で、東洋女子歯科医学専門学校(現・東洋学園大学)で学んでいた土屋静子さん(98)は傘を差さずに、スタンドで声援を送っていた。大切な角巻が雨にぬれ、紺色の染料が白いブラウスに落ちるのにも気がならなかった。

静岡県白浜村(現・下田市)に生まれた。医者のお父か

ら「女の人は手に職を持たないとダメだ」と言われて歯科医を目指し、41年に同校に進学。東京の街はずで軍国主義に染まってい

しかし「しっかりやれ、と言われたらどう。いよいよ大戦争に行くんだ」と実感した。

「いつかは順番が来る」。そう覚悟していたが、出撃することなく8月15日の終戦を迎えた。

戦後、大手建設会社に就職し、日本の復興を支えた。出征が決まっていたため、45年1月、結婚式を挙げた。

1945年に入り、特攻に向かう仲間たちを見送ることにした。

「没」の文字が並ぶ。「戦争のない日本に生きる」とほ、とても幸せなことがかみしめてほしい」と語る。

夫の武運長久を祈って、赤い糸を布に縫い付けた「千人針」も用意したが、出征は延期され、そのまま終戦を迎えた。

戦後、2人は地元の下田市で歯科医を営み、子ども8人、孫6人、ひ孫7人の大家族ができた。寛さんは18年前に亡くなったが、「夫と一緒に生きる」とができて本当に良かった」と頬を緩める。夫に渡すことになった千人針は、今も大切に手元に残している。

「戦争に反対する気持ちを持ってなかった。洗脳されたようなものだった」と振り返る。

壮行会から1年後、親戚の紹介で歯科医師を目指す学生だった土屋寛さんと出会った。交際を始めた後、寛さんも同じ会場にいたことを知った。寛さんも出征が決まっていたため、45年1月、結婚式を挙げた。